

「おい、こら、床で寝るな」

……………うう。

「将来、腰に来るぞ。せめて椅子にしろ」

……ふあ、す、すいません。今、どきま……………えっ。あ。

「自販機のミルクティーでもおごってやりたいところなんだが、あいにく物理権限がないんだ。すまない」

なんだ……、これは……。夢か？ 俺は夢を見ているのか？

「エナドリもたいがいにしろよ」

いや、夢じゃないな。……………そうか。そういうことか。この状況は。ああ。なんてことだ。まさか。信じられん。……………貴方は。

「その顔、すべてもうお見通しのようだな」

貴方は——未来の俺だ。そうなんでしょう？

「さすがだ。あいつより順応早いな」

ということは、本当に量子記憶装置^{アラ}内へのアクセスは実現可能で、そして……………ここもま

た記録世界だと。

「そういうことだ。説明の手間が省けて助かる」

ははっ……。ふふ。そうか。できるんだ。本当にアクセスは可能なんだ。俺の理論は正しかった。俺は、……俺は一行いちぎょうさんを救える。救えるんだ。うっ。ううっ……。ぐすっ。ああ。くそ。すいません。ですよね。貴方がここへ来たということは、そういうことですよね。

「……………ああ」

しかも、俺が老人になる前に。そう遠くない未来に。

「これはアクセス用のアバターだがな。容姿は変更できる。もしかするとよぼよぼの老人かもわからんぞ。……冗談だよ。そんな怖い顔をするな。このアバターはほぼ実物どおりと言っている」

からかわないでくださいよ。確かに、かなり痩せましたかね。だが、まだそんな歳ではない。そうなんでしょう。いや、そもそもですね。今から何年後なんですか。その、一行さんが……目を覚ますのは。

「あまりこういうのは言わないほうが良いとは思いますが、そうだな……in this decadeとだけ言っておこう」

そう来ましたか。ケネディの名演説とはね。We choose to go to the moon in this decade——この十年以内に、か。でも、俺はもう九年間も走り続けてきた。ここからさらに十年なんて、耐えられませんか。限界なんです。貴方は……うーむ、どうもやりづらない。なんて呼べばいいですかね。

「ならば、先生と呼べ」

ふっ。先生、ですか。ずいぶんと上から目線ですね。ですが本当にアルトラへのアクセスを成し遂げ、一行さんを救ったというのなら、俺は頭が上がらない。いいでしょう。先生と呼ばますよ。こちらでも利用させてもらいます。十年を可能な限り短縮するために、俺は先生に訊きたいことが山ほどある。まず――。

「落ち着け。俺はアクセスのやり方を教えに来たわけじゃない」

いや、ちよつと。そりゃないですよ。俺が今、どれだけ行き詰まってるのか、先生なら知ってるはずだ。ノイズの件だけで、もう四ヶ月を棒に振ってる。こうしている間にだつて、俺と一行さんの人生の残り時間は減っていくんです。

「俺が教えたら意味がないんだよ。お前が自力で解にたどり着くことに意義があるんだ」
そんな精神論を聞きたいんじゃないやしませんよ。

「アクセスの成立性が保証されただけでも大変なブレイクスルーだと思うが？　これまで

は原理的に実現可能かどうかさえ、未知数だったのだから」

それは、そうですが。

「そうだな、一つだけ教えてやろう。ノイズの確率共振は気にするだけ無駄だ。本質はそこじゃない」

え。

「あと、俺のところには未来の俺は来なかった。この事実が意味するところは、わかるよな」

つまりその、先生は、自力でアクセスに成功したと。

「そうだ。だからお前にもできるはずだ。まあ、頑張れ」

ですが、俺と先生がこうして接触した段階で記録には変化が生じてしまっている。目標に積極的に合わせていく必要があるはずです。俺の計画でも、過去の自分を教え導いてやるつもりです。だから先生だって、俺にいろんなノウハウを。

「ふ、まだまだ精進が足りんな。お前の計画と俺の計画には、決定的に違う点がある。記録の改竄の有無だ」

どういう意味です。

「お前は、記録をねじ曲げて彼女を事故から救おうとしている。ちよつとやそつとの改竄

じゃない。人ひとりの人生がまるつきり変わるんだ。彼女に関わる人間の人生も、まるで違ったものになる。バタフライエフェクトだ。するとどうなる」

アルタラ内部の障害が増え続けて、閾値を超える。そうしたら連鎖崩壊、ですね。

「ああ。お前はそのシナリオありきで彼女の量子精神を引き抜こうとしている。まあ、事が済んだらリカバリする気なのだろうが」

ええ、元よりそのつもりです。……そりゃあ、その、千古^{せんこ}さんやセンターのみんなに大きな迷惑をかけるだろうとは自覚してますよ。ですが、俺にだって命に代えても譲れないものがある。時間が止まったあの日から、そのために生きてきた。悠長な理想論なんて言ってられないんだ。これでも迷惑行為の埋め合わせになるくらいには、センターに貢献してきたつもりです。そんな目で見ないでください。先生だってそうだったんでしよう。「……それもあるが、今問いたいのはそこじゃない。お前の世界そのものの存続を心配してるんだ。お前が俺のノウハウでチートした結果、記録の破損が拡大してお前の世界が崩壊するわけにはいかないだろ、ということだ」

ははっ、大げさな。その程度の改竄で、そこまでのカラストロフィックな障害が起こるわけがないじゃないですか。

「いや、わからんぞ。別に脅してるわけじゃない。連鎖崩壊まで行かないにしても、アク

セスの実現がかえって遠のくかもしれない。彼女を救えないかもしれない。お前がやろうとしているのは、そのくらい危うい、成功確率の低い無謀な試みなんだよ。何か一つ間違えただけでゲームオーバーなんだ」

うぐっ……。悔しいですが、確かに説得力はありますね。

「だから、俺の計画では記録を改竄しない。お前は記録のとおり動かなければならない。俺のところに来た俺は来なかったと言っただろう。俺とお前がこうして会って話をして、いること自体、すぐに修復されなければならない」

なん。ですって。

「自動修復システムは優秀だよ。お前が寝て起きたら、この事象はなかったことになっているだろう」

……じゃあ、アクセスが実現可能だったことも、確率共振に意味はないって話も、明日になれば、その。

「そう。お前はすべて忘れる。いや、正確には、最初からそんな話を聞かなかったということになるだけだ。たとえメモを取ったところで、白紙に戻るだろうな」

そんな……そんな。ひどすぎる。あんまりですよ。せつかく、一縷の望みが見えたというのに。またあの闇の中の手探りに俺を戻す気ですか。先生は何しに来たんですか。俺を

上げて落として、優越感に浸りに来たんですか。見当違いの試行錯誤を高みの見物ですか。
「断じてそれはない。ただの俺の身勝手なのは否めないが、自分を貶めるためにわざわざ危険を冒したりはしない」

では、なぜ。

「……すべてが終わったあとで、一番苦しかった時期のことを、ふと思い出したんだ。お前、かなり悩んでいただろう。一行さんのご両親から相談を受けて」

……。

「もう止めようかとまで思い詰めてただろう。いいから振り向かず進め。余計なこと考える暇があったら手を動かせ」

……明日の俺がそれを覚えていないとしても、ですか。

「自動修復システムの誤り訂正が、原理上100%の修復ではないことは知っているよな？ 微視的には、良くも悪くも自由度がある。巨視的な統計量として整合が取れていれば良しとシステムは判断する。だからこそ、有限の観測データからでも無限の世界を生成できる」

何が言いたいんです。

「俺の痕跡が修復されても、飛び飛びの量子化誤差の範囲内に、少しばかりの影響は残る

かも知れない。整合性を侵さないレベルで、何らかの爪痕が残せているかもしれない。ま、所詮、勝手な希望的観測だな。外部からは観測のしようがない」

先生の話はどうも矛盾してます。さっき、言いましたよね。俺の計画は、少しの間違いが死を招く危うい試みだって。その言い分を信じるなら、その些細な爪痕が、積もり積もって俺の計画を失敗させてしまったりはしないんですか。先生の干渉が影響するのかもしれないのか、一体どっちなんですか。

「あらゆる記録事象には量子化誤差が付随する。俺が来ようが来まいが、状況は変わらない」

先生の干渉の有無にかかわらず、微視的には記録の世界は完全な決定論的世界ではないと。

「その通り。誤差は蓄積されていく。統計的には平均ゼロでも、移動距離の期待値はゼロじゃない。無限の時間が経てば、原点に戻ることもあるだろう。しかし、お前に残された時間は有限だ」

ランダム・ウォークですね。そちらの世界にとっては無数の試行の一つなのでしょうが、俺にとっては一度きりの人生だ。アンサンブル平均なんて無意味ですよ先生。自動修復システムがいくら優秀でも、そこからこぼれ落ちた誤差が積み重なっていくとしたら、やは

り対策は必要なのではないですか。ランダムな歩みを正しい方向に導く何かが。記録の外から来た先生は、それができる唯一の人間だと思うのですが。

「心配するな。そっちの対策は、別の人の仕事だ」

はあ？

「いつか分かる。今は迷わず進め。迷うとランダムネスが増すぞ。さあ、無駄話はこのくらいにして仕事に戻れ。俺もそろそろタイムリミットだ」

するとなんですか。先生は、単に迷わず進めというだけのためにわざわざ来たんですか。俺の記憶には何も残らないのに？

「まあ、そうなるな。自己満なのは否めない。邪魔して悪かったな」

ふっ。本当に自己満ですね。まあ、先生が来たということ自体が、俺の理論の何よりの傍証になるので、許しますが。記憶に留めておきたかった。今日ばかりは自己修復システムを恨みますよ。

「お前もセンターで揉まれて、だいぶ口が達者になったものだな」

伊達に苦労してませんよ。俺も、先生も。

「そうだな。まあ、お前ならできるってことは俺が物理的に保証する。だから——カタガキナオミ、幸せになれ」

……まだ気にしてるんですか。彼女の捨て台詞。

「そういうお前こそブーメランだからな」

俺は先生の記録なんですから、先生が幸せなら俺も幸せになれる。ただそれだけです。

「俺は……」

ああ、みなまで言わなくていいです。さっき、今の俺の状態を「一番苦しい時期」と言いましたよね。そう言い切れるのは強いですよ。一行さんを救い出せた人間だけが言える台詞です。

「……………」

まあ、明日にはこの話も忘れてしまつて、またもがき続ける日々が始まるんでしょうけど。だけど束の間、未来を確信させてくれたことに、感謝します。

「……ああ。そう言ってもらえると、来た甲斐があつた。こちらこそ感謝する。未来は、お前の想像力の遙か先まで広がっている」

ええ。いつか絶対にそこにたどり着きます。——やっつてやりますよ、先生。

(ピッ) (ガコン)

あ、ちよつと、何すんですか。勝手にボタン押して。俺はミルクティーなんか……え？
え!?

「お疲れ様です。今日くらいエナドリはやめといたほうが良いですよ」

え、いや、あの。……………ああ。そうか。そうなのか。夢？ いや、夢じゃないな。
信じられん。……貴方は。

「その顔、すべてもうお見通しのようですね」

貴方は——未来の俺だ。そうなんでしょう？

「ああ、やつぱり、さすがです」

てことは、量子記憶装置^{アルタラ}へのアクセスはやはり実現可能で、そして、ここもまた記録世界だと。

「もう僕から説明することは何もなさそうですね」

ははっ……。ふふ。できるんだ。本当にアクセスは可能なんだ。俺の理論は正しかった。

俺は、……俺は一行いちぎょうさんを救える。救えるんだ。ああ。ですよ。そういうことですよ。ね。

「……………ええ」

しかも、俺が老人になる前に。そう遠くない未来に。

「このアバターはほぼ実物どおりです。ほぼタメと思ってもらって大丈夫ですよ」

タメだと!? ……ほう。ということは俺がアクセスに成功する日も近いということか。よしっ。というか、タメなら何も、敬語使わなくとも。むしろこちらが敬語を使うべきなのでは。

「いや、気にしないでください。タメ口で全然大丈夫です。こっちは、その、何となく敬語で話したい気分というか」

どうも調子狂うな……。そっちがタメ口をきいてくれるのなら、かまわないが。

「……わかった。こ、これでどうだ」

なんでそんなに緊張してるんだよ。

「き、緊張なんかしてない。その、ええと、……うあー！ すみません！ タメ口やっぱ無理でした！」

……自分の将来が非常に不安になってきたな。本当に俺なんだろうか。もしかして、俺

のクローンか？ 俺の子孫？

「違います！」

はあ。……まあ、見た目は確かに俺なんだよな。鏡を見ているようで落ち着かない。それがこんなに取り乱ししていると、こっちが恥ずかしくなってくるな。

「すいません。ほんとすいません」

うーむ。それじゃ、互いにいい大人だし、対等に敬語ということ。どうですかね。

「あ、そうですね。そのほうがまだ、やりやすいかもです。ありがとうございます」

そもそも貴方のことはなんて呼べばいいんですかね。

「普通に直実^{ナオミ}とかでいいですよ」

いくらなんでも、紛らわしすぎませんかね。

「じゃあ、その、例えばなんですけど、貴方のことを先生とお呼びしてもいいですか……？」

え？ 意味がわからん。普通、逆じゃないんですか。未来から来たほうが、物事をよく知ってるものでしょう。

「それはそうなんですけど……過去の貴方がいたからこそ未来の自分が在る。そういう意味で、貴方に敬意を示したくて」

ご先祖様にでもなった気分だな。まあ、もう好きにしてください。というか、こちらにとつては貴方のほうが先生ですよ。本当にアクセスを成し遂げ、一行さんを救ったというのなら俺は頭が上がりません。訊きたいことが山ほどあります。まず――。

「ちよっと待ってください。それは教えられません」

いや、ちよっとそりやないですよ。俺が今どれだけ行き詰まってるのか、貴方なら知ってるはずだ。ノイズの問題だけで、もう四ヶ月を棒に振ってる。こうしている間にだって、俺と一行さんの人生の残り時間は減っていくんです。

「アクセスの成立性が保証されただけでも大変なブレイクスルーだと思いませんか。これまでは原理的に実現可能かどうかさえ、未知数だったんですから」

それは、そうですが。

「だから先生にもできるはずなんです。というか実際に、できた」

ですが、俺と貴方がこうして接触した段階で記録の変化は始まっているはずで、積極的に合わせていく必要があるという理解です。そのためにも、俺はアクセス先で過去の自分を教え導いてやろうと計画してます。だから貴方だって、俺にいろんなノウハウを。

「それは無理です。だいたい、先生がそんなチートをしてしまったら、記録が変わります。記録の破損が拡大したら、先生の世界が崩壊してしまうリスクがあります。先生は誰にも

教わらずに、自力で解にたどり着いたはずなんです」

ははっ、大げさな。その程度の改竄で、そこまでのカラストロフィックな障害が起こるわけがないじゃないですか。

「いや、わかりませんよ。別に脅してるわけじゃありません。連鎖崩壊まで行かないにしても、アクセスの実現がかえって遠のくかもしれない。彼女を救えないかもしれない。先生がやろうとしているのは、そのくらい危うい、成功確率の低い無謀な試みなんです。何か一つ間違えただけでゲームオーバーです」

うぐっ……。悔しいですが、確かに説得力はありますね。

「もしかしたら、先生と僕がこうして会って話をしていること自体、すぐに狐面に修復されてしまうかもしれない。記録の外からのアクセスは、記録の範囲外だろうから」

狐面……？　なんですかそれは。

「あ、いや、自動修復システム、と言いたかったんです」

なん、ですって。……じゃあ、アクセスが実現可能だったことも、明日になれば、その「なかったことになるのかもしれないね」

そんな……そんな。ひどすぎる。あんまりだ。せつかく、一縷の望みが見えたというのに。またあの闇の中の手探りに俺を戻す気ですか。貴方は何しに来たんですか。俺を上げ

て落として、優越感に浸りに来たんですか。見当違いの試行錯誤を高みの見物ですか。
「ただの身勝手なのは否認ません。……」

(了)